

飛驒の伝承わらべ歌類と風土習俗

付 第一・二報補遺

—— 飛驒調査報告第三報 ——

大 谷 千 尋

序

さきに第一報及び第二報において、飛驒のことは並ひに伝承民謡からうかかわれる地域的風土習俗の考察をこころみたのであったか、今回はこの地に伝承されている童歌乃至はその唱え言（呼び声）の類と地域性との関連をみることを主たる目標とし、兼ねて第一報第二報の補遺につとめようとした。

しかしながら、いわゆる「わらへうた」は地域の特性につなかる点において、一般民謡ほど密てはなく、むしろ広域的に共通な「子供の生活」に根ざしているものが多いことは当然であろうし、その上、戦後の生活の変化——子供の遊びの急激な変化や、特にラジオ、テレビジョン等の普及かもたらした共通歌謡の風靡におされて、かかる伝承わらへ歌の類かもはやこともの口にのほらぬようになつてゐることも多いたらうことは、当然予想されたのであった。

実際調査に当たってみると、この点は予期以上のものかあつて、特に、地域における伝承歌謡の忘失を惜しむ人々か、すてに熱心な拾集作業によつて多数の資料をまとめ上げてゐる反面に、現地訪歴によつてこれをたしかめようとする、現実にはもはやこれを知らぬ子ともたちか多いはかりか、相当な年輩者もすてにその記憶の正確

さを欠くものが多いのか事実であつた。したかつて本報告は、厳密には最初の目標から逸脱して、いわは風土習俗の過去をまほろしに描いてみようとしているものかかないと言えないし、また必ずしも地域の特性を示すものに限られていないことにもなるけれども、数多くの既成の資料と、少数ながら自らの探訪資料とを基に若干の考察を加えてみたものや、多くの拾集記録者と同様に、あえてこれを忘伏せしめるにしのひない心情から——いや、わけて心引かれるものか多いままに、その一部を掲げて報告することにしたのである。なお、第一・二報の補遺の部については、少数ながら現地訪歴によつて拾集したものか主である。

本 論

〔一〕 雪国の子とも

(1) 降り 降り こんこ

空見りや 虫 虫

央(なか)見りや 綿 わた

下見りや 雪よ (山田白馬氏の集録その他による)

雪国飛驒の子ともたちは、われわれの想像以上に雪降りをよろこ

ぶ。十二月に入つて降つた雪は、ともするとそのまま根雪となつて翌春の四月まで消えないような雪深い奥飛驒の子ともたちにとつても、雪はその故にいやな物とはせられないはかりか、長い冬に欠くことのできない景物として、むしろこれをよるこひ迎えるのであつて、その雪降りを眺めながらうたうこの歌には、さすかにさつさつと降る雪の相を見きわめる鋭い目のあることを感じさせられる。「空見りや 虫虫 なか見りや 綿綿」とはまさに写し得て妙という外はない。

もっともこの眼はあなち飛驒の子とも特有のものとは言いきれないようである。藤田圭雄著「童謡歳時記」(昭四〇・一二刊)によると、新潟地方の子ともか

天上見れば あく(灰)だ

中見れば 綿だ

下見れば 雪だ 雪だ

と歌い、また

天井は煤だ

下は 豆腐だ

とうたつていふということ、まさに符節をあわせるようなもののあることを知るのであるが、雪国の子の共通の眼かとらえた雪降りの相とでもいふべきだろうか。

(2) 大寒む 小寒む

はんばして 遊ぼ

滑りばんはで 汗かいた

ころけりや ぬくい

—同前—

「はんば」は雪かきの道具の一つ、木製の「すき」の形をしたものをいう由で、このはんばを使って遊ぶのか「はんばして遊ぶ」て

ある。雪かき用のばんばは、子ともたちにはそのまま「そり」の代りにもなるわけて、寒い雪にめけす外へ飛び出して行く子どもや、それを見まもる親たちのすかたまでしのはれるよううたである。

(3) かつてこ かつてこ

なんまんだあ

ようその ぼうさ

尻きつた

—(山田白馬)—

はけしい寒さは降り積つた雪の面を固く凍らせて、その上を歩いても容易に落ちこまぬほど固くする。こうなつた積雪を「かつて」とか「かつてこ」と呼び、この上を踏みまわつて遊ぶのを「かつてに乗る」などともいうのである。たまたま表面を踏み破ると、すとんと落ちこんで腰のあたりまでも埋つてしまうから自力でははい出せないこともある。そんな時はみんなはやし立てながら助け出すわけて、その時ははやしうたかこれである。

またこの固つた雪はように溶けないので、麦畑や春蒔きをしようとする畑などは、何とか早く雪を消そうとつとめられる。即ちその表面に砂や灰を撒くわけて、これを「かつてまき」と呼ばれる。ところかこの「かつてまき」は雪遊びをしたい子ども達には気に入らぬわけて、次のようなはやし歌か生まれたりしている。

(4) 砂まき爺の 意地悪る

お尻を犬に ぬむらりよ

「ぬむらりよ」は「なめられよ」であるこというまでもなく、腰をきめて「かつてまき」をしている爺さんに憎まれ口をたたいて子供姿を見るような気かする。

(5) 降れ 降れ あられんこ

はら はら 撒きやれ

ちゅうちゅうか おとる

米かと おとる

—同前—

「ちゅうちゅう」は雀。あられの降るさまを写したものと、(1)の雪ほどではないか子守でもしている者のうた声としてみると捨て難いものがある。

〔二〕 自然の中に生きる子とも

(1) 陽光を呼ぶ

○ ひーさま ひーさま

こっち おいて

むかいの山に

さるか三匹おって

とって食ってまった

雑誌「飛騨春秋」六——六や高山市成人学校編集の資料に載っているものである。陽光を求めていろいろと呼ひかける声は各地にあるようにあるか、「猿か三匹おって、取って食ってまった」とは何を意味するのか明らかでないからに、何やら山国の子を彷彿させるものかあっておもしろい。遊んでいるうちに陽かかけて来ると、大声をはり上げて一せいに陽をよんだ記憶は、遠いかけ絵でも見るように、私自身の子供すかたを描き出しもする。

○ お日さま こさま

そっちはか 照らしと

こっちの子か 立くに

こっちも ちいと 照っとくれ

というのかその詞であったか、飛騨ではまたこれを、

○ あっちはっか 照って

こっちはっか 照らしんと

ようないわい ようないわい

ほうきんもつて とーすくす

(高山成人学校資料)

とうたうという。最後の句は「ほうきを持ってなくなるそ」の意であるから、前者より強要的気分か強い。さらに東濃岩村地方でも

○ 天道さん 天道さん

あっちはっか照らすと

こっちの子か立くて

照らせ 照らせ

と呼ぶことか、「ひたひと」五——一二号に見えている。第二句の「照らすと」は、やはり「照らないて」であろう。

(2) 風を呼ぶ

○ お山のお山の 天狗さん

風を とーとと

おくれんさい

おみきの一杯も

あけますに

—小坂町誌その他—

○ とーしん とーしん 風いこせ

風をいこさにや

山とめる

—同前—

たこ上げ——飛騨地方では古くは「いかのぼり」と云った——をしようとする子ともか風を待つ歌である。「とーしん」については土田吉左エ門氏か「東神か、風をつかさとる神。云々」(飛騨のこと)としていたけれども、格別根拠があるように思われない。むしろ飛騨春秋に笠原烏丸氏か「とーしん」は唐人とても書いて天狗のことをそう呼んだのだからとしていいのか当っているのはなからうか。前歌か天狗さんにおみきを上げて祈る態になっているのと

思い合わせると、とれほど頼んでもこ利益がなくて風が来そうもないとなったときこの第二の歌詞かとひ出しそうに思われる。それはもう「祈願」ではなく「強要」の語気である。風をよこさねはお前か山に住むことを禁(と)める、つまり住みなれた山を追い出してしまふという語気である。異形の天狗を「唐人」と呼んだと考えられそうな気がするのである。

東濃岩村地方にもこれに似たりたかあって、

○ たこたこあかれ

西のはは 風よこせ

風よこさんと 山きるそ

―ひたびと五―一二―

とうたうという。西の婆は「にし」(西風)を支配するものを指すのだろうか、ここでも「風よこさんと 山きるそ」とおとしかけているのはおもしろい。山の子ともか気に入らぬ相手に「山きるそ」「山とめる」そとののしる気持には格別なものかあるのではなからうか。奥飛宮川村地方では水あそひの時の日照を待つ呼び声として「天気 天気 させーよ。ささぬと 山とめーる」というのかあるという。何にしても子ともたちにとつては「とーじん」や「にしのはは」はあまりせんさくの対象にはならない——というより、てんにいろいろんなものの姿を想い描いているのかも知れない。

(3) 野鳥と遊ぶ

○ ちゅうり こ

(筆者註 雀 来 い)

かあ こ

(〃 鳥 来 い)

あっぱくれるね

(〃 餅をやるに)

たつてこ

(〃 飛んて来い)

「あっぱ」は餅(もち)、飛驒一円とこでも通用している。山田白馬氏の説くところでは、雀や鳥を呼んで正月のもちを与える一種

の「年こひ」の行事であったという。正月に田の神をまつて供えた餅を、からすかくわえて飛べは縁起かよいと喜ぶ風習か、いまも山村には見られるし、また正月の恵方棚に供える餅などを、ねすみ——大黒天の使いという考え方があった——にも与えようと、わざわざ土間の一隅などに供える風習もあったことと思ひあわせると、白馬氏の説く通りかも知れない。しかし私か古川町の一老婦人から聴取したところでは、必ずしもそうした意味ではなく、子守なとしなから、固くなった餅を高くさし上げてこの歌をうたうと、必ず何羽かの鳥か飛んて来たので、手で割っては与えたものたつたという。子ともをおふったりして、案外子もりうたとして歌われていくことも多かったのではなからうか。この歌にはそんな気配が多分に感せられる。

○ 雀はちゅうちゅう 忠三郎

鳥はかあかあ 勘三郎

とんひは信濃のかねたたき

―小坂町誌―

昭和四十年刊の小坂町誌に「子守歌」として載せてあるものであるか、空に舞うとひやからすを見つけると一せいに大声でよひかけたりする子供の群を想い描かせられるような歌である。たた最後の句は「とんひは富山のかねたたき」として高山地方でうたうものの方か、頭韻の關係からみても本来のものにちかいない。とひか「かねたたき」(乞食)と呼ばれるのはなぜか? 舞い舞いして餅をあさるのに対する連想から来たものだろうか。この三句の外に「鳩は八幡 みみくさり」の一句を入れてうたう地方もあるというか、これも頭韻のおもしろさ以外、私にはこう呼ぶ理由かわからない。

○ とんひ とんひ まいまいしよ

あさつての市に

あかいべをかってくれる

あかいべか いらにゃ

袴を買って くれる

—江馬三枝子 飛驒の民話—

「あかいへ」は「赤い着物」であること言うまでもないか、秋田県あたりでも

○ とんひ とんひ

にしえこ くれるから 廻れ 廻れ

とんひ とんひ

鶏一羽くれるから 廻れ 廻れ

とうたうという——(神岡町公民館編の資料による)——ように、「とひ」の大きく舞うのを見つけて廻れ廻れと呼ひかけるのは子とも心の自然というものたろう。それにしても赤い着物や袴を買ってやるからと云い、また「にしえこ」(にしん)や「にわとり」をやるからと呼ぶような共通点のあるのはとういうわけか、やはり「かねたたき」と呼ばれるのと共通な気合を「とひ」には感しさせられるものかあるのかも知れない。

○ からす からす

あとの鳥 さあけ行け

わりかうちや 焼けとるね

ははかきよ さあい

ししかきよ さあい

—江馬三枝子—

まっ赤にやけた夕空に、ねくらへかえる「からす」の群を見つけた子ともたちの呼び声である。「ははかきよ」は「大便をかけよ」であり「しし」は小便であるから、「お前の家か焼けているからそれをかけて消せ」というのたすとすると、からすの糞か特に量の多いことをふまえているのたろうか。からすかとひとけんかする時に

は、からすか糞をかけるので、とひの方が負けるのたというような話を老婆から聞いたことなと思ひ出すか、真偽の程は知らない。

○ ちいちく ちっ ちく

ちっちゃん 小坊主

戻から 飛んて来た

山から 飛んて来た

寒いとて 飛んて来た

○ ちっちく ちっちく

ちっちゃん 小坊主

水屋をのそき

お背戸をのそき

茶やふへ かくれた

くもとつてやるね

出て来い 小坊主

両者ともに「回想の童うた」(山田白馬)に見えるもので「みそさざい」という題かつけてある。この小鳥の生態を知るものなら、題名かなくてもはつきりそれとわかる程巧みに描写し得ているといえるたろう。しかも前に見た雪のうたとはちかった洗練さかあつて、いわゆる伝承わらへ歌の域から超脱している感があるか、特定の作者を知る由もない。

(4) なしみのけものたち

農家ては牛馬も家族の一員として扱われ、住家の内に「まや」(厩)を構えもしたし、正月ともなれば犬や猫にまでこちそうをして歳迎えを祝つたのは飛驒も他の地方とかわらない。か、飛驒のわらへ歌に出て来るけものは不思議にもこういう動物たちでなく、普通には厄介もの視されている「ねすみ」や「いたち」なとてあるの

はとういうわけだろう。

○よめさの膳は

かまとの前よ

よい歳とりやいの

気かねは いらん

たっぶり あかれ

—山田白馬「回想の重うた」による—

こう書いて見ると、何やら農家の嫁の歳越し祝いの膳につく位置でもうたいあけられているように、そのあわれさをそそれそうだが、実はここにいう「よめさ」は「ねすみ」のことであり、年迎えのこ馳走をねすみにも与えているのである。

前にもちよつと蝕れたように、ねすみは大黒天の使われ者というような俗信は可なり多くの地方にあったように、私の家でもかつては土蔵の壁にはられな大黒天像の前に、正月の飾りもちなとを供えたものは早くねすみか食うほと縁起かよいとよろこんだりした記憶があるし、こうしてねすみをもてなせは、そのわるさ、(悪戯)を防ぎ、福德をもたらすのだというように祖母から聞いたことも思い出す。それにねすみは人語を解するというので「よめさ」という隠語てよはれたもののように、俳諧では古くから正月のねすみを「嫁君」(よめかきみ)と呼んでいるのは周知の通りである。

ともあれ、歳こしの準備もすつかりととのって、ほつとしたようなゆとりの心かこのうたからは感じられる。その点では必ずしも「わらべ」のうたでなく家内みんなのうたであるといえそうだし、ねすみはもはや家中ををあらしまわる憎まれものとしてではなくて、いじらしいような愛きょう者として見る心にささえられているようである。

もつとも子供ころには平素のねすみも仲よしの友たちであった

ように、

○あなねすよう

あなねすよ

まいこと かくりよ

いたきち きたそ

のようなものか伝えられているかと思うと、

○いたち きちきち

猫さえ おらにゃ

おらか 世の中 なおよかろ

いたち きちきち

ちよつと 顔見せろ

—「飛驒の民話」(江馬三枝子)—

のようなものもあって、いたちも案外あいきょう者に見られていたようにあるか、当の子ともたち果してこうした心か残っているものかとうか。

なお白馬氏の回想童謡中に次のようなかあって、捨てかたい味を覚えるので紹介するとともに、簡単に註記を加えることにする。

○嫁 は や し

花餅 はだか

おんもは雪よ

つしこの庫たて

小女臈か汗かいた

孕女(はらみめ)小女臈

梁橋長こして

だいもち よもかろ

ちゅう ちゅう きやり

おんほか いたむ

(筆者註 穴鼠よ)

(うまくかくれよ)

—(山田白馬)

筆者註 はたか—白い米の餅
おんも—戸外

小女臈—ねすみを指す

梁橋長こして—「はり」か長くて

「だいもち」—神社などの大建築材
や庭石など重量物を運ぶのをたいも
ちひぎという。

尻重よめさ

尻軽よめさ

大黒様の お氣に入り

お供えたんまり 頂いて

お尻か よもて

よいむこ とりやいの

(5) 昆虫と子供たち

子どもの子供の生活の生活につなかりにつなかりそうそうな昆虫な昆虫といといえは、ほほたる・ととんほ・ちちょう・せせみ・ああり・ははち等々等々可可なりなりの数の数に上上りりそうそうてあるてあるか、飛飛驒驒の伝承の伝承童歌童歌に出出るるものはああまり多多くくない。せせみやちちょうょうか見見当当らず、ははちはたはまたたま何何かの歌の歌の中の中に「ははちににささされ」のようのように出出るだけだけて、ははちそのもののものををうをうたたつたものは見見当当らない。

螢狩のりの歌の歌は恐恐らく全全国的的に共共通通するもののか多多いのでああろうか、また同同じ飛驒のの内の内ても歌詞の部分的にはささままさまてある。

○ ほおっほおっ ほったろこい

そっちのふんふ(水) にかいそ

こっちのふんふ あまいそ

これかもつとも共共通通的なものので、「ふふんふ」を「みみず」といいうか否否かを別別にすすれば、一一応とここてもううたわわれていいるようようであるか、地地方色のの多多いもの若若干をああけければ次次のようようである。

○ ほおっ ほおっ

ほったろこーや こーやこや

あっちのみーざあ にかいそ

こっちのみーざあ あまいそ

ほったるこーや こーやこや | 古川町にて | 一老人から聴取 |

○ ほーっ ほーっ ほったるこい

そっちの水は にかいね

こっちの水は あまいね

おちたらたまこの水水くれる

ほーっ ほーっ ほったるこい

ほったろこい 乳乳くれる

あっちの水は にかいそ

こっちの水は あまいそ

やまふきこい 宿宿かせる

○ ほったろこい こみこみしよ

やまんはこい 宿宿かせる

苔苔のしとねに 露露ふいて

○ ほったるこい 山山んほこい

そっちのふんふ にかいね

こっちのふんふ あまいね

○ ほったるこい 山山んほこい

ほったるこい ちちくれる

山山んほこい 宿宿かせる

「こーやこや」は「来来いよ」「にかいね」は「にかいに」の訛、

「やまんは・やまんほ・やまふき」等は大きい螢源氏螢を指す

ものであることは各地でたたしかめ得得たか、「こみこみしよ」の意味

はよくわからない。

○ とんほ とんほ とまれ

虫虫とって 食食わそ

○ とんほ とんほ

命命くれるに たたってけ

ちゅうちゅうに ととられんな

| 江島三枝子 |

| 古川町一老婦人から聴取 |

| 小坂町誌 |

| 山田白鳥 |

とんぼに関するものがないかと、可なり多くの地方で質してみたが、ついに土地の人から聴取することはできなかった。ここに掲げたものは両者とも山田白馬氏の拾録にかかるものであるか、採集の地は明示されていない。あとの歌は「たん捕えたとんぼを放してやる時のことはたろう。「たつてけ」は「飛んで行け」であり、「雀にとられるな」と呼びかけているのである。

○ いほ いほ 出てこい

穴ほって 出てこい

まめかんで くれる

こんしこんじ 出てこい

穴ほって 出てこい

豆かんで くれる

—江馬三枝子—

「いほいほ」も「こんじ」もともにあり、地獄の方言である。大木のもとや神社の拝殿の床下などの砂地に、丸いすり鉢状の穴をつくってあり、落ちこむの待っている「ありじこく」は、幼い子ともたちのよい遊び相手になったものである。「穴ほって出てこい」につづけて

「蜜あり あげよ

こそこそ こそはゆ」

とりたうものもある。掘り出した虫を掌中に軽くにぎってその動きを感じているのだう。

〔三〕 「ことは」にあそぶ子ども

(1) 尻 取り 歌

○ 梅に鶯 ほうほけきよ

京都の名物 京人形

行儀のよい子は りこうな子

子供の好きな 布袋さん

算術読み書き みな上手

すんすんたまる 屋根の雪

行きも帰りも 汽車の旅

足袋はきぬてん こゝるてん

天神さまには 牛と梅

これは大野郡清見村でうたわれている「尻取り歌」であるとして、飛驒春秋（三六年二月号）に載せられているもの（筆者水口源二郎）である。また高山市成人学校郷土教室受講者の編集になる「飛驒の童うた」のなかに、別れのあいさつから発展することはの遊ひとして紹介されているものに、次のようなものがある。

○ さよなら三角 またきて四角

四角はトッペ トノペは白い （筆者註 トノペ＝豆腐）

白いは兎 兎ははねる

はねるはのーみ のーみは赤い

赤いはほうすき ほうすきはなーる

なーるはラッパ ラッパは 光る

光るはおやしのはけ頭 （以下略す）

かかる類のものもつといろいろありそうに思われるのだか、現地訪歴ではついに聴きとることかてきなかった。もつともそれは必ずしも現存しないというのではなく、それをきく機会に恵まれなかったというべきだろう。現に小坂町誌に見える次のものなど、私も少年時代にはよくうたった——叫んだもので、可なり広く行なわれたものだか、昨今ではもうどこでも殆んど忘れ去られたものだろうと思っていた。ところが最近になって、なわとひをしなからこれを

うたつて遊ぶ子供たちか、高山本線鶉沼駅近くにいることを知ったのである。

○陸軍の 乃木さんか 凱旋す

すすめ めしろ ロシヤ 野蛮団

クロバトキン きんたま マカロフ

ふんとし しめた 高しゅつぽ

ぼんやり (陸軍の……)

(2) かそえうた

かそえ歌の類は非常に多い。多くは「手まり歌」や「お手玉歌」——(飛騨では「おちよ玉うた」とも「おしゃみうた」とも——として歌い伝えられて来たものであるか、その形態も内容も極めて雑多であるとともに、本来の「わらべうた」としてはまことにふさわしからぬものもある。それに最近の子ともたちは「まりつき」や「お手玉遊び」をすることか少なくなつたので、こうした歌か子供によつてうたわれることも少なく、現地調査に當つてみると可なり
の年輩者——むしろ老人でないといふものが多いのか実情であるか、既集の資料や若干の現地聴取のものについて考えてみたい。もつともいわゆる「てまりうた」や「お手玉うた」については別項にまとめることにして、ここでは「かそえ歌」の類についての一部をあけるにとめる。

○(1)

一つとえのなゝのな

ひとつも通らぬ山道を

おはんと長衛は通るそな

この唐人と おもようか よか

二つとえのなゝのな

ふたまた大根は離れても
おはんと長衛は離れない

(以下はやし詞 省略—すべて前に同じ)

三つとえのなゝのなあ

三日月様さえ雲のかけ

おはんと長衛は笹のかけ

四つとえのなゝのな

用のない街道を二度三度

おはんに会うとてまた一度

五つとえのなゝのな

いつ来て見ても戸かあかん

この戸は憎いかけかねしや

六つとえのなゝのな

むくての花さえ二度咲くに

おはんの花はまた一度

七つとえのなゝのな

何も知らない子供衆か

手毬の拍子で面白い

八つとえのなゝのな

藪の中から鶯か

ほけきよと鳴いたら出て来やれ

九つとえのなゝのな

ここで死のうか腹切ろか

おはんを連れて走ろうか

十とえのなゝのな

遠くい富山で鐘か鳴る

今鳴る鐘は何の鐘
おはんに来いとどの鐘じゃけな
この唐人と おもようか よか

「飛驒の童うた」(高山市成人学校)による。

○(2)

一つとえのなのな
一人もんじん米の町
米屋の姉さまおるいとて
このとう人と ようわたいた
二つとえのなのな
二人兄弟あるなかを
連れて走るの面白さ
このとう人と ようわたいた
三つとえのなのな
見たい逢いたいふしの山
忍びでなければ逢いはせぬ
(はやしことは前と同じ、以下略す)
四つとえのなのな
吉原子とも衆か手まりつき
てまりの拍子の面白さ
五つとえのなのな
いつももんしんなるたはこ
おるいにのませてよろこはしよ
六つとえのなのな
むくけの花さえ二度さくに
おるいの花はなぜ咲かぬ

○(3)

(七つ以下、忘却の由にて記載なし。)
(昭和四十三年九月「飛驒春秋」別冊、内木あや著
「ふるさと遊び」による)

一つとおーえのなーのなあ
ひとりもんじん米のもち
こめやのあねさん うるいとて
このとうぜんとー おーようかよか
二つとおーえのなーのなあ
ふたりきょうだいあるなかを
つれてはしるのおもしろさ
(はやしことは前と同じ、略)
三つとおーえのなーのなあ
みたいあいたい ふじのやま
しのふでなければ あいはせの
(あいはせぬ)
四つとおーえのなーのなあ
よのないかいとを二度三度
子供に見られて はすかしや
五つとおーえのなーのなあ
いつ来て見ても戸はあかの
(開かぬ)
この戸のにくや かけかねは
六つとーえのなーのなあ
むかい 小山のかねか鳴る
いま鳴るかねは何のかね
七つとおーえのなーのなあ
なんにも知らぬ子ともしゅは

てまるの拍子のおもしろさ

八つとおーえのなーのなあ

やしきを ひろめて火をたいて

うるいときちそはなみさわく

九つとおーえのなーのなあ

ここてあわねはとこてあう

こくらくじょうじの道てあう

十とおーえのなーのなあ

とおくい富山のかねか鳴る

いまなる鐘は初夜のかね

—(昭和四二・一〇・五・古川町にて)
—(稲越喜作老八三才からきく) —

ここに敢て煩雜をかえりみず(1)から(3)まで全歌を、かかけたのは、かかるかそえ歌の性格や、その伝誦中の変化などを考える手がかりになりそうに思うからである。○(1)は浄瑠璃「桂川連理柵」(かつらかわれんりのしからみ)——通称「おはん長右衛門」——によるものであることはいうまでもなく、安永五年(一七七六)初上演以来、操り芝居にも歌舞伎にもしばしば上演せられて、大いに盛況を見たといわれるこの曲の流行のほとも察せられるのであるか、このかそえ歌は内容からみてもおそらく酒席の座興にうたわれたりしたものであろう。それか手まり歌としてうたわれるとき、当の子ともたちはもちろんおはん長右衛門の密通から心中に至る筋書きなど知っていたわけはなからうし、そういう内容など意識に上ってもいなかったにちかいない。せいせい二人の男女の仲のよさをおぼろけに感じて、むしろその幸を祝福するような心で歌っていたものもあるうけれど、要は「かそえうた」独特の一首ずつ頭韻をふん

て数をかそえて行く面目さと、その軽快なりズムとを楽しんで、内容的にはほとんど無心に受け流していることか多かつたのではなからうか。たからこそ、そのはやし詞かほとんど何を意味するかわからぬものであってもいっこうに苦にはしなかつたたろうし、そのうちに地方の伝説・説話のようなものをまじえて勝手に作りかえられたり、更はその語句の混合か生じたりしても、平気たつたたろう。——今では記憶ちかひのための錯乱も多からうことか当然考えられる。

何にしてもこのかそえ歌は、てまり歌として流行したとはいえ、内容的には子供の生活につながるものではなく、いわは大人の座興的なものとして生れたものか、その韻律と拍子の軽快さからてまりつきに合せて歌いつかれて来たものと考えられるし、この元歌か何処て生れ、との地方に行なわれたかも興味のある問題であるか、いまはそれまで考察するすへかない。

これに類する「てまりうた」は他にもいろいろあろうし、可なり広域的に流行したものはないかと考えられるか、例えばは押岡町下之本公民館編の「郷土民謡第二集」には次のものか見えている。

○ 一番初めは一の宮

二また日光の東照宮

三また佐倉の宗五郎て

四また信濃の善光寺

五つ出雲の大村

六つ村々天神様

七つ成田の不動様

八つやまた(筆者註 やわたか?)の八幡様

九つ高野の弘法様

十て東京の観首様

それほと信心したけれど

浪子の病気はなおらない

こうこうごとなく汽車は

浪子と武男の別れ汽車

位いて血をはくほととぎす

(昭和四二・下之本公民館
民謡研究会)

さらにこの秋の現地調査中、古川町の一老人から聴取し得た次のものなども、この種に属するものといえるたろう。

○ 一つ火吹付 風の穴たより

二つ舟のり 船頭かたより

三つ味噌玉 かひるかたより

四つよはいとは 日暮かたより

五つ医者とは 葉だんすたより

六つむこ取りや 娘かたより

七つなりてん(南天) お花かたより

八つ山伏や ほらの貝かたより

九つこもそう(虚無僧) 尺八たより

(十は忘れたという)

(昭和四二・一〇・五、古川町稲越老八一才)

以上のような、いわは大人の遊ひうたともいうものに対して、次のようなものになるとまことにたわいもない子どものものという感じが濃い。

○ ひとつやふたつの赤ちゃんか

三つ みかんを 食へ過ぎて

四つ 夜中に 腹くだし

五つ いつもの お医者さま

六つ むかいの 看護婦さん

七つ 位いても なおらない

八つ やっぱり なおらない

九つ こん晩 死にそうだ

十て とうとう 死んじゃった

(高山市成人学校)

○ いっちゃんこの

にいちゃんか

さんちゃんどこて

しいこいて

こめんといわすに

にけちやった

―同前―

かそえ歌といわれるかとうかとも思われるし、まことにたわいもないものであるか、子どもたちにはこれでけっこう楽しいのである。更にこの類に属するものでふざけうたともいうべきものに次のようなものがある。こうなるともはや「かそえうた」ではないけれども、ついでにここに紹介しておきたい。

○ 一つや二つの婆さんか

八十いくつの孫をつれ

水なし川にとひこんで

とつべのかけらて足切った

(飛騨春秋七―五)

これは古川地方の手まりうたとして載っているものであるが、「とつべ」は方言で「豆腐のこととわかれば、この歌のねらうところは明らかである。

(3) 手まりうた

尻取り歌やかそえ歌は、手まりをついたりお手玉をとったりするような遊戯と結びついたものか多かるうけれども、また一面には必

すしもそうした遊びの動きと関係することなしに、単にその歌詞や韻律の面白さに興してうたわれたことも少なくなかったにちがいない。これに対して専ら手まりつきのうたとしてうたわれたもの——もつとも、単独に、この歌詞か唱えられることか無かったというのではないか——と見るべきもの若干をあけて見ることにする。

○京て一番 小坂て二番

さかり三番 吉野て四番

郡上て五番の あねさまたちか

ちゃらりちゃらりと 雪駄をはいて

村の若い衆に たきとめられて

おきやり はなしやり帯口やとける

帯はとけても 結ひもなるか

縁の切れたは 結はれぬ 結はれぬ —小坂町誌—

○けいはい けいはい おしろいけいはい

べったりけはって お歯黒つけて

お歯黒つけて 頬紅さいて

ほうへにさいて 目紅(めいへに)さいて

目紅さいて 中ほほ結うて

中ほほ結うて おつとを出いて

おつとを出いて おひんをうかし

おひんをうかいて 前髪結うて

前髪結うて 勝山結うて

勝山結うて 中差しさいて

中差さいて お櫛をさいて

お櫛をさいて かんさしさいて

かんさしさいて 襦袢をつけて

しゅはんをつけて 白もくつけて
白もくつけて 黒もくつけて

これかしまいの しゅすの帯

しゅすの帯

—小坂町誌による—

「京て一番」の歌は、はしめにちょっと数えうた的な面白さをもつか内容は大人のなものであるし、二番目も多分に「おとな」の歌の感か強いけれども、「まりつき」の遊びか年頃の娘たちの間にもさかんに行なわれたとすれはうなすけるといふものたろう。「けいはい」はおそらく「けはい」(化粧)から来たもの、おしろいをぬることからはしまつて、紅をさし髪を結い、櫛やかんさしをさして衣装を着けるまでの手順を、七七調のなたらかさもおもしろく歌いながら、おしろいを塗つたり紅をさしたりするしくさから、髪を結つたり着物を着かざるふりまで、うたに合わせて手ふり面白くまりをつく娘子たちの風情は、そのかわいい着物姿と共に情緒豊かな詩景として想い描かれるのたか、実は今や殆どこの遊びを見ることはできなくなつてしまった。

○おらか大事な おてまる様は

紙て包んで こよりてしめて

しめたところを いろはと書いて

赤紙つくしか 白紙つくしか

隣り近所の○○様から △△様へと

お渡し申します

たしかに たしかに 受取り申します

(○○様と△△様へはお互いの名前をいれて、つきつきと

まりを渡す)

以上三つの歌は、いずれも小坂町誌に、地方のてまり歌として載

せているはかりでなく、また「飛驒の童うた」として集められた資料に見られるものではあるけれども、必ずしも飛驒独特のものではなく、多分に「京ぶり」を感じさせられるものであるか、次のものなどは或はこの地方独自のものかと考えられる。

○はくさん ばくさん

牛とお馬と かえまいか

ひんどんとん (又はハイドウドウ)

ひんとんとん (ヒンドウドウ)

この歌は、小坂町誌によると、二人でまりをつきなから、お互のまりをとりかえてつく遊びだとしているし、江馬氏は向い合った子供が、このうたをうたいながら、片足とひで居所をかえる遊びだとしているから、まりつきはかりでなく幼い子供たちの遊びの間にもよくうたわれたものだろう。「はくさん」の「はく」は、「はくろう」をでも呼ぶのだろうか。

(4) 「おちよたま」と「いらみ」の遊びにつれて

まりつきと同様に女兒の遊びとしてさかに行なわれたものに「お手だま」と「おはじき」があった。飛驒ではお手だまを「おちよだま」又は「おしゃみ」といい、おはじきを「いらみ」とか「いらびき」といった。このうち「おちよたま」遊びにはこれに伴う歌かたくさんあったか、「いらみ」はその遊自体、歌とはつながらない。ただ、互に一定数のいらみを出し合ったり、勝負の数とりをする時には二個ずついっしょに数えるのか普通で、その時に唱える文句は大てい次のようなものであった。これも必ずしもこの地方に限る唱え方とは限らぬかと考えられるか、また独自のものもある。

○「ちゅうちゅうだあけの とお」(十個)

○「ちゅうちゅうたこかいな」(以上、内木あや氏による)

○「しろやまの しろぎつね」

○「やまぶしの ほらのかい」

○「はなばたの きくのはな」(以上、山田白馬氏による)

さて、おちよだま歌は可なりに多くか集められているか、現地で当ってみると、部分的には記憶していても、完全に記憶しているというひとはあまりないようである。元来この地方独自のものかあったのではなく、京や江戸の方から伝えられたものか多かろうと考えられるふしもある上に、語義のわかりにくいことも一つの特徴と言えそうである。語義はわからぬながらも、お手玉を投げたり集めたり、いろいろな手さはぎとそれに応じたことはとかうまく調和するのを楽しんで歌いつづけられて来たものかと考えられるか、いまやこの遊びもほとんど忘れ去られたようである。

次にあげるものは恐らくお手玉歌の代表的なものと考えてよいものだろうと思うので、小坂町誌所載のものを参考にしながら、内木氏の「ふるさとの遊び」によって紹介することにした。

○おっさらえ お一つおろして おっさら お二つ お二つ

お二つおろして おっさら。お三つ お三つ お三つおろして

おっさら。おみんなおろしておっさら。(二回) おてし

やみ おてしやみ おてしやみおろして おっさら おっか

み おっかみ おっかみおろして おっさら おちりんこ

おちりんこ おちりんこ おろして おっさら おひーだり

おひーだり だーりだり なかつか つまよせ おっさら

だいきち しょうきち おっさら しーぶしーふ まめきつ

て おっさら おってんふし おってんぶし おっさら て

またき てまたきおてまたき やねこし やねこし おっさ

ら ちいはしとんでいけ ちいはしとんでいけ おっさら
たいかんはしわたれ たいかんはし わたれ おっさら し
やりんこしやりんこと おしてといつくれた お一つやのお
おむすめ お二つやのおおむすめ お三つやのおおむすめ：
： おっさら とっこいしょ おっさら とっこいしょ お
っさら おっさら

(筆者註) 内本氏のは実は「おっさらえ」となっているし、このときは
お手玉をすべて一つかみに、さらえる動作になるから、「おっさらえ」
か正しいかと思うか、飛騨川下流方面では、多く「おっさら」とうたっ
て来たし、小坂町誌にもそうなっているから、敢てこれにしたかった。

〔四〕 呪言(まじないことは)と子とも

久々野中学校の教頭小瀬氏(上宝村出身50才)から聞いたところ
によると、乳歯か抜けたあとによい歯か生えるようにおまじない
をする風習があったという。抜けた乳歯を手にして「ねすみの歯よ
りはようはよ(早く生えよ)と三へん唱えて、その歯を屋根の上
へ投げるのたのことで、こういう呪いごとをする地方か他にある
かとうか知らないか、眼のはたにできる「ものもらい」のおまじな
いたとか、いぼをとるまじないとかを本気になってやった少年時
代の記憶は私にも忘れられない。

いまの子ともははやそうした呪いなと一顧だにしないようにな
っているかも知れないか、たた一つ川あそび―水あひ―の時に耳に
水か入った時には「おまじない」まかいのことをやっているのでは
なかるうか。飛騨の各地にみられるそれは次のようである。

○ かーらの かーらの とーいし
みみのみーす たっていけ
とーっ

○ 耳だれ ほったれ

ほったら とー | (以上、高山市成人学校資料から) |

○ みみ とつとー

○ みみの みんなきたま

かわの かんしきたま

こーし こじ

| (以上、古川町にて聴取) |

これらの文句は、大てい川原の陽にやけた熱い石を耳にあてて唱
えるのだとか、その石を他の小石でかちかち叩くとか、小おとりし
て唱えるのたとかいうように動作をとるの普通で、おまじな
いの効果は案外その動作の効によっているのかも知れない。しかし
前に述べた「風を呼ぶよた」や、日照をもとめる呼び声なども一面
こういうまじないことの心に通ずるものかあるのではなかるうか。

〔五〕 その他―(正月をまつ子供)

以上に引用紹介したものの外、別記参考資料に収められている童
歌の類は極めて多いけれども今は割愛することにして、ただ正月を
待つ子どもの声ともいうべきものの一・二を紹介するにとどめた
い。

○ 正月神様 とこまでござった

きりぎり山の 外までござった

土産はなんだ

かやや勝栗 たいたい くねんほ

みかんやきりこふ

数の子や勝栗

串柿でお出てたあ

おいてたあ

○ 正月あええ 盆よりええ

| 飛騨の民話(江馬) |

ふくりの歯のようなあつぽ食って

雪のようなまんま食べて

ちんこの毛のようなこふそえて

赤いべっぺ着て羽根ついて

背丈あるよなくそこいた

—同前による—

「きりきり山」かとういう意味かわからないか、おそらく「きりはた」(やきはた)をする山の意で、里近い山あたりを指すものではなからうか。第二の歌詞は下品に終っているか、極めて貧しい食糧事情の中に生きて来た山村の子供の痛切なあこかれともいふべきものをきくように心うたれるものかある。さきにみた民謡に「河内米の飯祭か盆か：：」というのかあったか、いわゆる「はれの日」(祝日など)以外は米の飯を炊くことか無かったのは、敢て小坂の奥地「河内郷」に限ったことか無かったのは、たとえば「平湯米の飯：：」の如く、地名を入れかえて各地でうたわれていたことか知られる——というよりも、それは必ずしも飛驒に限らず、山村の常であったわけて、正月をまつ心の大きな期待の一つは米の飯を腹いっぱい食へられるということかであったのである。

付 — 第一、二報の補遺

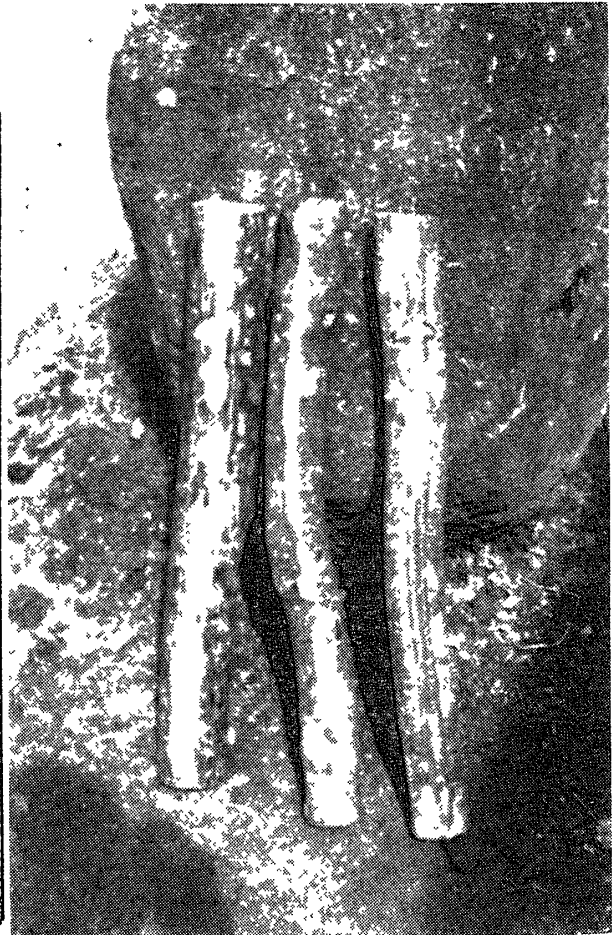
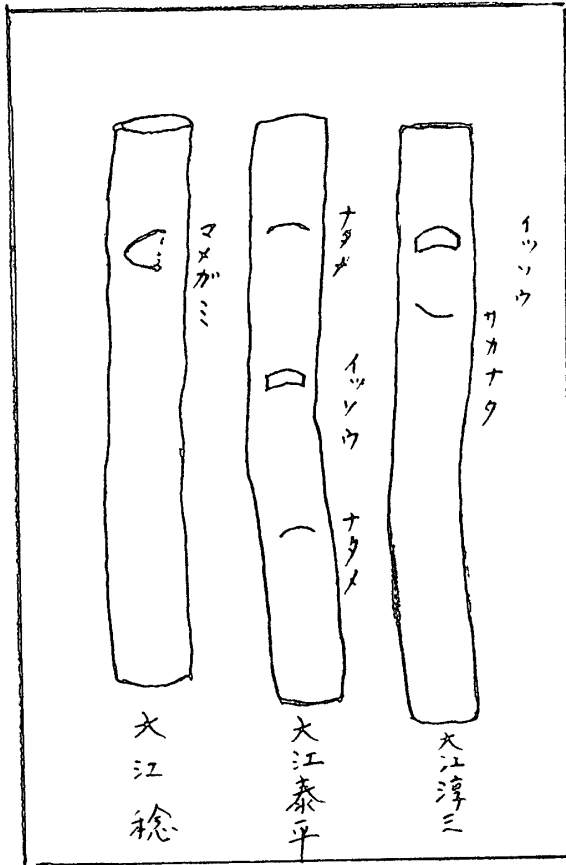
さきに「飛驒調査報告第一報」と同第二報とにおいて、飛驒のことはや伝承民謡からその風土習俗の考察を試みたのであったか、いずれも極めて貧弱な資料を基にして、まことに不十分な考察を加えたに過ぎないで終っている。今回その地のわらへ歌の類を調査するに当って、折にふれて前二報の不備や遺漏を補うことにつとめたのであったか、やはり十分にこれを果し得なかつたことは残念である。か、多少とも拾い得たものをここにあわせて紹介しておきたい。

(一) ほたしるし

第一報に「なたしるし」として報告したものは、大野郡宮村の現地において、代情通蔵氏——(今はすてに故人)——から聴き得たものであって、榎木(ほたき)に「なた」て印をつけて各自の所有を示すものを「なたしるし」といい、決して他人のものか混同することかないことや、「ほた」に印をするに止まらず、農具などにもこの印を用いることかあるとしたのであった。

ところか去る九月下旬に再び同村を訪れた私は、その実際を見ようとしたのであったか、折から稲刈中の人々にきいても、稲は、さ、用の材料——この木材にはかつては「なたしるし」かうたれたことかある筈である——を運んでいる人に聞いても、また土地の旧家とされている家を訪ねても、ついにその実際かそんなものかを見ることはできなかつたし、そうした印の話はきいているという人かあつても、実際かとういうものかについては、かなりの年輩者てさえ知らぬというのであった。考えて見れば、宮川を流して榎を運ぶような必要かなくなつてからすてに長い年月になるし、農具の印にも用いたとはいつても、重要な道具にはそんなさつな印なかつけるはずかないのだから、もはやその実物か残存しないのか当然かも知れない。

まさにあきらめて帰ろうとした私は、とほとほと水のかれた宮川に沿って歩き出したのであったか、たまたま、黒不圭三氏という公民館に勤務する老人に質して見たことから、氏の案内て大江厚三氏(七十二才)に会い、つふさに「ほたしるし」について知ることかできた。(なたしるしとも言わぬてはないか、「ほたしるし」か普通だという)氏は長年榎出しの仕事に従事した経験かある由て、折から稲刈りの仕事か特に帰宅すると、さつそく榎木の実物を取り出して来て、ばんばんとなたを振りなから印を入れて見せてくれたの



である。その器用にすはやく打ちこまれるなたの手さはきに、私はいかにも練達者の腕を見る思いをしたことであるか、いまやこうして印を入れ得る者は、この地にも何人もいないだろうし、いわゆる「宮楯」の印かとれたけであったか、まして誰の家の印かそんなものであったかの一切を集めることは困難になるだろうとのことであった。

写真は同氏の家の印並ひに近隣二軒の家印であるとして、氏が手はやく打って見せてくれたものであるか、うまく写っていないので別に図示をそえることにした。なたの入れ方には一つ一つの名称かあって、図に見える大江淳三家のものは「イツソウ」に「サカナタ」大江泰市家のものは「イソソウ」に、上下に「ナタメ」、大江稔家のものは「マメガミ」と呼ぶのたという。写真では「イソソウ」や「マメガミ」は白く刻まれているのかわかるか、「サカナタ」（なたを下方から打ちこむ）や「ナタメ」（なたを上方から打ちこむ）は見えない。尚、楯木のたてに削られている（白く見える）のは、「宮楯」の特長で楯の乾燥をよくするためのものであり、その皮かまた燃料として町へ売られたものだという。

ちなみに宮楯の長さは二尺一寸（凡そ三三―三四センチ）かきまりであった。

(二) くさやすみ（くさのくちやすみ）

中山七里のほほ中央辺にあたる「保井戸」部落を訪れた時、ここの旧家の主人矢島計郎氏（七一）か、近年に至ってすっかり変ってしまったこの部落の生活を話しながら、そのかみをなつかしむように話してくれたことはの一つか

「くさやすみ」正確にいえば「くさのくちやすみ」というのであった。

飛騨地方の農家か家畜の飼料や緑肥用の草刈りにけん命の努力をして来たことは前にも触れたが、ここ保井戸部落では毎年五月二十三日を「くさやすみ」と呼んで農作業を一切やすみ、その翌日から一せいに草刈りをはじめたのだという。とくに一日の休みを定めたのは、翌日からの仕事のはけしさにそなえるためもあったかと留われるか、むしろ山草刈りの作業をはじめめる時期を規制したもので、お互か勝手に早く山草を刈り取ることを禁じたものにちかいない。その証には、くさやすみの翌朝は皆か暗いうちから刈りにかかったもので、たいまつの明りをたよりにして刈ることか多かつたというのである。

もっともこの草刈作業は一面には若い男女のはつらつたる意氣の見せ場にもなり楽しいふん囲氣をかもし出すものであつたやうて、矢鳥老の話にも、そうしたもののへなつかしさかこめられているかに感じられた。いわゆる草刈歌か大声にうたい合わされたのも、この時てあろう。小坂町誌には次のようなものか見えている。

○草を刈りやるか 刈干ししやるか

鎌かきれぬか おいとしや

○鎌かきれぬは 研いてもやるか

わしか研いたと おしやるなよ

○うたい出いたよ 朝草刈りか

ねふた声して ほろほると

○おらか大事な 草刈る山ね

藤やいはらか なけりやよい

○藤やいはらか ありゃこそ殿さ

藪のこかけて のや殿さ

(三) 「河内」の地域

第二報に「河内米の飯まつりか盆か云々」の歌をあけて、河内と呼はれたのか益田川の上流高山本線「なぎさ」駅あたりの呼び名のように思われるかまた確かめ得ないとしておいた。小坂の役場附近その他て数人の人に聞いても要領を得なかつたのである。然るに今回斐太後風土記を入手するに及んで疑問点はたちまち氷解した。同書から要点を摘記して参考に資したい。

河内郷 大野郡 九郷内 七箇村。此郷は四隣の久々野郷、阿多野郷、小

坂郷とは山を立隔て、いかにも河内(加波宇知の波宇約て不となる)と謂ふべき地理なり。何れも古名にてあらむ。(中略)七箇

村引下村小坊村木賊洞村長淀村楮村有道阿多粕村いづれも一村限に山を隔て住。又阿多野河は急流にて舟も通はぬ河内郷にてあれは古へは往来人もなかりけむ(以下略)

右の通りて、私の推定位置は略々當つていたわけであるか、いま新旧地名の対照をしてみると、この七箇村は現久々野村の大部分を占めることになる。もっとも、米の飯を「祭か盆か、親の年忌か正月か」より食べなかつたのは必ずしもこの河内郷に限られなかつたことは前にも述べた通りである。

(四) 「とめ」と「ひませ」

生活様式か変るにつれて、農家の「いろり」さえ無くなるような最近では、よほと山深い地へても入らぬともはや実感の伴なぬものたけれとも、この夏の現地訪歴て聞きえた語に「とめ」又は「とね」という語かあつた。これはすてに山田白馬氏か昭和十年刊「ひだひと」(三一―一号)に報告していることはあるか、古くは各家々か祖先伝来の火種を大切にもちつすける風習かあつて、太い楢や

木の株を「いろり」で焚いて、その火種を消さぬように用心したもののたという。これを「とね」とか「とめ」とかいうのは、火の神をこれに留め祀るものというところからの称たというか、現地訪歴にあたってたしかめたところでは、古川地方の古老にこれをよく知っている人かあったか、実際にはもはや「とめ」を守っている家はこのあたりには無いとのことであった。

こうした各家の火種を大切にする習わしは婚姻の上にもあらわれて、両家の婚姻は相互の火種を交せあわせることになるという考え方を生じている。「火ませ」かそれ、婚礼の夜には、嫁入る方は自家の火をうつした「たいまつ」におくられて出かけると、これを迎える家も自宅の火種からうつした松明を持って途中まで出迎える。そして両家のたいまつを組み合わせた火の下をくくって、嫁は婚家に入るのか慣習であった。江馬三枝子著飛驒の民話の中に、子供の遊び「通せんほう」の歌として

○ 向うの山で 光るもな何しや

星かほたるか こかねの虫か

今来る嫁の たいまつよ

たいまつならば やり上げて通せ

やせ男しゅう

というのかあり、手をつないで道を通せんほをする時に歌うものたとしているか、やはり「火ませ」の慣習かあってこそ生れたものにかかない。

(五) ほうしょう(はらほうしょう)

飛驒のあちこちで聞いた一つの奇習ともいうべきものに、一定の日を限って他家の農作物を無断で取ることかゆるされたものかあった。たとえば益田郡馬瀬村では、旧暦八月十五日に初めて里い

もを掘って食へる習慣かあって、これを「ほうしょう」と言ったことであるか、この夜に限って畑のものなら他人のものをとって食へてもよいとせられていたという。もつともこれには一つの制約かあって、「谷を渡って取ってはいけない」ということになっていった。戦後はこういうこともなくなったか、ひな祭り用供物の野菜とほうしょうの食へ物だけか公然と他人のものを取れるものとせられていたというのである。

また下呂町中原農協の事務所てきた所でも、ここは旧暦九月の満月の夜には、他家の「あせ豆」をとって来て食へてもよいことになっていて、これを「はらほうしょう」といったというし、高山市郊外出身の一老人は宮(一ノ宮)の祭当日(九月二十五日)には、溝川を越えぬ限りとこの作り物をとって食へてもよいという習わしかあったと話してくれた。

「ほうしょう」の語義か何かはつきりしないか、「豊穰たろう」という馬瀬村教育長日野氏の意見か当るのかも知れない。分類祭祀習俗語彙(柳田)には熊本県阿蘇地方でホージョーヤという語に豊穰会と書いていることか見えている。もつともこれは阿蘇神社御田実祭をいうもので、この神事に使った箸をもらってそれで食へさせると左きか治るといふのたさうだから、意味か別だろうかとも考えられるか、島根県にも「ホウジョイマツリとかイモノコマツリとって、イモノコを食へる」(一八頁)習慣かあることなど見えているのは興味か深いし、九月九日をホゼの節供とって棕(ちまき)を神に供え、その日は腹いっぱい食へぬと年中ひもしい思いをするといふ腹のさけるほど食へたという地方(屋久島)かあったことも見えているのは、「はらほうしょう」と何か似通うものかありそうて面白い。

ともあれ、ここで「谷を渡らねはー」とか、「溝川を越えない限りー」というように制限を設けられていたのは無意味ではない。この山里では、それを越えない限り自分の畑か身内の畑——乃至はせいぜい近隣のもの以外の作物はとれないだろう。とすると、ひとのものは言っても、何の縁故もない他人のものはとらぬという山の人の良心かにじみ出ているのではなからうか。

(六) 伝承民謡の補遺

第二報に載せたものの他に、二、三の注目すべきものを挙げて見たい。

(1) 田植 うた

○ 誰かいるやら 顔さえ見えぬ

百苗取ったに また夜か明けぬ

○ 腰か痛いて 空見るわいな

お陽のはすれを 待つわいな

―下ノ本公民館編―

百たはも苗をとつてもまた夜か明けぬというほど早くからはたき出しているのだ。陽の沈むのを待ち遠しく思うほど疲れもしよう。昔の田植時の忙しさは、恐らく今のわれわれには想像もつかぬほどだったにちかいない。

(2) わらひ根掘りのうた

○ さこにふんはり 誰にもやらぬ

一人しめして 堀るわらひ

○ 雪の花舞う わらひの山て

トンガ凍って 手か痛い

○ 汗水たらいた 白はな供え

高い買ひ手の 来るよに祈る

―同前―

第二報に説明した通り、「とんか」は「唐鋏」「はな」は「わらひ

粉」であることかわかれは、わらひ根掘りの労苦とともにまた人々かこれにかけた執念にも似た心か理解できるだろう。

結 び

伝承わらべ歌を実地に当って拾集することは、今の私には時間的にも体力的にも不可能に近い。かといって、アンケートを求めて集めたのでは結局のところすでに多くの人がこころみたもの以上には出ないだろう。そこで今回は先人達の集められたものを資料として風土や習俗につなかりそうなものを検討し、また多少でもこれを現地についてたしかめてみることにしたのであった。にもかかわらず現地訪歴をしてみると、これらの資料にあるものの多くについて、もはやこれを知っている人が少ないのが実情である。それほど飛驒の地もかわったというのだろう。

世の進運につれて、古いものか忘れ去られることの多いのはやむを得ぬことでもあり、一面当然のことでもあろう。ただ各地の古老の話ふりの中にうかかわれたように、古い習俗や行事の中に見られた人間的な心のあたたかさか、そういう行事習俗とともに消え去ってしまうとしたらまことに惜しいことというべく、その忘失を惜しむ心がすてに多くの人によってこころみられた方言拾集や伝承歌謡の記録という作業にあらわれているように、私のこのこころみたとえ極めて一部分に過ぎないにせよ亡びゆく習俗への哀惜の心や、風土愛的情感をそそのる手かかりになれば幸である。

尚この地にうたわれて来た「子守歌」の類についても見るべきものがあるか、子守歌は童歌とは別にすべきものかと考えて割愛した（伝承民謡の補遺とするには、第二報に集めたものの趣旨かその地の労働や生活事情をうたひ上げたものにあつたのとあわぬのでそれ

もやめたわけてある。

参 考 資 料

- 郷土民謡 第二集
飛驒の童うた
回想の飛驒童謡
飛驒の民話
民謡詩集飛驒はふるさと
岐阜県益田郡誌
岐阜県小坂町誌
飛驒のことは
斐太後風土記 上、下
童謡歳時記
雑誌「飛驒春秋」
々 「ひたひと」
ふるさとの遊び
分類祭祀習俗語彙
民俗学辞典
年中行事辞典
- 神岡町下之本公民館
民謡研究会(昭四二、非売品)
高山市成人学校
郷土教室受講者(昭四一、非売品)
山田白馬(飛驒春秋第十一号第八号)
江馬三枝子 一九六四年 未 来 社
水 谷 京 昭四〇年 冬 至 書 房
益田郡役所 大正五年
小 坂 町 昭四〇年
土田吉左衛門 昭三四年 農飛民俗の会
雄 三 閣 昭四三年
藤 田 圭 雄 昭四〇年 牧 書 店
- 内 木 あ や 昭四二年 飛驒春秋別冊
柳 田 国 男 昭三八年 角 川 書 店
柳田国男監修 昭四二年 東 京 堂 出 版
西角井正慶 昭四二年 同 右